

和人がつけた川の名前



明治29年(1896)発行の地形図。今の美生川は「ピパイロ川」であり、「美生」村には「ピパイロ」とふりがながしてある。
(国土地理院所蔵の1/5万地形図(帯広)を使用、着色)

十勝の地名や川の名前には、アイヌ語名に和人が当て字をした名前がたくさんあります。

例えば、「利別川」は「トゥシペツ」で「縄(ヘビ)川」。「札内川」は「サツナイ」で「かわく川」の意味です。「別」や「内」は、アイヌ語の「ペツ」「ナイ」(どちらも川の意味)に当てられた漢字なのです。(p127)

中には、美生川や歴舟川のように、もともとはそれぞれ「びばいろ(ピパイロ:カワシンジュ貝・多い)」「べるふね(ペルッネイ:水・大きい・者〔川〕)」と読まれていたのが、あとで「びせい」「れきふね」と読み方が変わってしまったものもあります。

一方、和人が、新しく自分たちの思いをこめてつけた名前もあります。

開拓や特産品に関係する名前

幕別町には、糠内川支流に「五位川」が、音更町には然別川支流に「矢部川」があります。

「五位」は富山県からの開拓団体である「五位団体(五位団体)」が入植したところに、また、「矢部」は富山県の「矢部団体」が入植したところついた地名です。どちらも、その場所を流れる川の名前にもなりました。(p167)

また、開拓後についた地区名からついた川の名前としては、士幌町の「共成川」や「北開川」などがあります。

清水町の「御影川」は、御影という地名(もとは村名)からつけられたのですが、この地名は特産品の御影石(花こう岩)から名づけられたものです。石が地名になり、川の名前になったのです。(p31)



音更町の矢部川と、幕別町の五位川。どちらの名前も、富山県から入植した開拓団体の名前からつけられた。
(国土地理院刊行の1/2万5千地形図(駒場・糠内)を使用)

人の名前も

暮らしていた人の名前がついた川や、その川の利用方法、あるいはその場所の自然からつけられた川の名もあります。

音更町の長流枝内川支流には、「小栗沢川」「林の沢川」「関根沢川」といった川があり、それぞれ、小栗さん・林さん・関根さんの名前からつけられました。

また、帯広市の「機関庫の川」は、かつてこの川から製糖工場の機関庫に水を引いたことから、こう呼ばれるようになりました。

そのほか、陸別町には利別川支流に「陸別熊の沢川」が、そのさらに支流には「熊泣川」「熊追川」など、クマが多かったことから名づけられた川があります。



地形図には小栗沢川や林の沢川はのっていないが、セキネザワ(関根沢)川はある。
(国土地理院刊行の1/5万地形図(十勝池田)を使用)

しいといわれる。
3 みの(蓑): 伝統的な雨具で、ワラなどで作られたレインコート。
4 笠(かさ): 伝統的な雨具で頭にかぶる。板、竹、イグサなどで作られた。

5 機関庫(きかんこ): 機関車のための車庫。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今そして未来へ

用語 さくいん